

- 1 主題 「人間の弱い心と、克服しようとする強く清らかな心」 内容項目D22「よりよく生きる喜び」
(資料 「二人の弟子」 西野真由美 著)

2 具体的構想

(1) 主題について

小学校では、今回初めてこの内容項目が置かれた。そのため小学校での既習事項を確認し、発達段階に応じた指導内容と方法についての工夫を重ねることが必要である。自分を高め、身近な仲間とより良い関係をつくり、人間として強さや気高さを身につけて生きようとする項目であり、いじめの防止等にもつながる内容項目である。

指導にあたり、まず自分だけが弱いのではないと気付かせることが大切であることに加え、自分を奮い立たせることで、生徒が自分の弱さや醜さを、気高さに変えられるという確かな自信を持ち、よりよく生きる喜びを見いだせることが求められている。

今回の資料では「修行から逃げ、死の淵から、また修行の場へ戻ってきた道信と、自分を裏切った道信と、その道心をあたたかく迎え入れた上人に対する、怒りや迷いで心が乱れている智行が、その心の醜さに気づいていくことを通して、人がだれしも持っている、弱さとそれに気づき克服するきよらかさや強さをもっていること、そしてそのように自分の心に向き合っ、生きていける人間の素晴らしさに、気付かせたい。

(2) 生徒の学習状況

本学級の道徳の授業で生徒は意欲的に参加し、ワークシートの記述等も熱心に行っている。しかし、授業者が意図した道徳的価値の理解の確かさ、発問への意欲的な返答、小集団での議論の活発化や深まりに関して不十分さを感じている。本主題に関し一般的には、中学校に入学して間もない時期には、人間が弱さや醜さを持つと同時に、強さやきよらかさを合わせてもつことを理解することができるようになるが、なかなか自分に自信が持てず劣等感にさいなまれたり、人をねたみうらやましく思ったりすることがあり、学年が上がるにつれて、すばらしい人生を送りたいという人間の持つ気高さを追い求める心が強くなり、自分を含め、人はだれでも人間らしい弱さを持っていることを認めるとともに決して絶望することなく誰に対しても人間としての良さを見出していこうとする態度が次第に育ってくると言われている。しかし、本学級の生徒においては、「弱さ・醜さ・強さ・克服・きよらかさ・気高さ・等々」という本主題に関係する内容が、人それぞれで異なっているという理解と、その視点で自分の心を見つめていく体験、そしてその気づきを、生活の中でよりよい言動へ結びつけていこうとする意欲や態度に不十分さを感じている。

(3) 資料「二人の弟子」(西野真由美著 あかつき)について

この資料は、仏道の修業から逃げ、様々な経験をしたのち、死の淵からまた修行の場へ戻ってきた道信と、自分や上人を裏切った道信への怒りの心をすてきれない智行が、その自分の心の弱さに気づいていく物語である。そして「雪の中に芽吹くふきのとう」と「夜の闇に照らされる白百合」が道信や智行のこころの状態や、気づきの象徴として描かれており、読者に自由な解釈の余地を残している。また上人の「人は自分自身と向き合って生きていかなければならない」ということばも、読者がこの物語を解釈し、深い思考へ入っていく手助けになっている。本資料には、本主題「人間の弱い心と、克服しようとする強く清らかな心」に迫っていく時の手掛かりである、「道心とふきのとう」「智行と白百合」「上人の言葉」という、登場人物の心を深く考えていける状況や存在が満載している。また、「ふきのとう」「白百合」という比喻で、人の心の気高さを肯定している魅力的な物語である。

(4) 指導の具体化(「特別な教科 道徳」として)

- 資料の中で、仏道の修業をしている道信と智行の場面を、生徒に役割演技をさせ、さらに、「修業・白拍子・本山」を絵や映像をもとに説明して、資料の中身をより深く理解できるようにする。 (体験的)
- 中心発問として投げかける言葉を丁寧に吟味し、また、基本発問を考えていくことが中心発問への布石となっているように工夫する。 (発問の工夫)
- 発問に対し、各個人でしっかり「自分の考え」を持たせ、「少人数で考えを出し合い議論し」、「議論後の自分の考え」を学級全体へ発表することで、「主題」に迫っていけるようにしていく。 (自我関与・議論の工夫)

(5) 本時のねらい

- 心の中に、「人それぞれの弱さと克服しようとする強さ清らかさ」を持ちながら生きていける人間の素晴らしさを肯定できる。

3 本時

(1) 日時 平成30年11月9日(金) 5校時

(2) 場所 3年6組 教室

(3) 展開

段階	教師の発問と予想される生徒の考え	教師の支援	評価の観点
<p>導入 (5)</p> <p>展開前段 (20)</p> <p>展開後段 (15)</p> <p>終末</p>	<p>1、本時のめあてを確認する。 (1) 強い心(めざす心)と弱い心(のりこえたい心)のイメージを出し合い話題にする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>めあて: 「弱い心と強い心」から人間のことを考えよう。</p> </div> <p>2、資料をもとに、弱い心・強い心・人間をさぐる。 (1) 仏教の修業の映像等を見る。 (2) 配布済み資料(二人の弟子)の内容を確認する。 (3) 基本発問1を考える。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>●智行は自分をどんな人間だと思っているだろうか(道信との比較で)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 厳しい修行をしている強い立派な人間 ・ 道信のように弱くはない人間 </div> <p>(4) 基本発問2を考える。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>●なぜ、白百合を見た智行は涙があふれ出したのだろうか。(涙があふれ出たとき智行が気づいたことは何だろうか)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 怒りで、道信を許せない自分の醜さに気づいたから。 ・ 迷いの心に支配されている弱い自分に気づいたから。 ・ 純白な白百合の凜とした姿が、智行の清らかな心、目指す姿を思い出させた。 </div> <p>3、資料と関係づけて深めながら、自分の心を見つめる。 (1) 中心発問について個人で考える。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>◎上人は「自分自身と向き合って生きていかなければならない」という言葉で、智行に何を伝えようとしたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 誰の心にも弱さはある ・ 自分と向き合うことでしか、弱さを克服できない。 ・ 道信は自分の弱さと向き合っている。 ・ 人間は強さ(きよらかさ)と弱さ(醜さ・怒り)の両面を持っている。 </div> <p>(2) 少人数で個人の考えを出し合い、議論する。 (3) 議論後の個人の意見を学級へ発表し、人の発表を聞く。</p> <p>4、発表や板書を振り返りながら、今日の学習のまとめを考える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>まとめ: 人それぞれにある弱さを克服する強さと清らかさを持って生きている人間はすばらしい。</p> </div> <p>5、授業で、気づいたことや、自分はどのような生き方をしたいかを書き発表する。</p>	<p>○強い心(目指す心・負けない心・克服する心・決断する心・気高い心)と弱い心(くじける心・ねたむ心・迷う心・イライラした心・醜い心)の具体を出し合い、考えることで、両者を幅広くとらえなおし、主題と資料の解釈に活かせるようにする。</p> <p>○資料の舞台である仏教の修業の映像を見せて、物語の解釈の理解を助ける。</p> <p>○「道信のこころ(絶望・あきらめ)」の弱さを「フキノトウ(命の力強さ)」と対比させる助言をおこない、道信の心にも迫れるようにしていき、そこから智行が自分をどう思っていたかを推量させる。</p> <p>○智行の怒りや迷いは、強い心と言えるだろうかと問いかけ、涙のわけに気づいていけるようにする</p> <p>○個人思考では、基本発問1, 2を振り返ることで、中心発問を考える助けとなるようにする。</p> <p>○少人数での議論の方法(司会者、議論の進め方、発表の仕方)を確認して、活発で深まりのあるものにする。</p> <p>○個人思考の場面と少人数での議論の時、ワークシートの記入を確認して、助言していく。</p> <p>○まとめの段階までを板書をもとに振りかえり、生徒の発表を生かして、まとめへとつなげていく。</p> <p>○自分のこれからの生き方に引き寄せて考え発表することで、まとめの内容を自分のこととして味わう。</p>	<p>人それぞれの弱い心と強い心の両方をもっていることを理解でき、その心を見つめ生きていく人間を素晴らしいと思える。 (発言・ワークシート)</p>

池をめぐらした本堂の奥から修行僧たちの読経が聞こえてくる。西山寺の深い木々の緑が白いもやの中からゆっくりと現れる。山門に立って深呼吸し、杉木立に囲まれた薄暗い参道に目をやった智行は、急な石段をゆっくり登ってくる一人の男がいるのを見つけた。ぼろの着物をまとい、髪をのぼしてやせこけた男の姿に、一瞬、眉をひそめ、声をかけようと歩みだして智行ははつと息をのんだ。

「道信、道信なのか。」

智行は土地の名家の三男に生まれた。幼いときから才覚を發揮しこの寺の上人に師事していた。道信は智行と同年輩で、さきの戦で孤児となり、上人が引き取って育てたのだった。若い二人の学問への深い情熱を愛した上人は、十四歳になった二人を都の本山へ送り出してくれた。

都での修行と学問の日々は今となつては懐かしいものだが、少年たちにはつらいものだった。智行は自分を励まして学問に没頭し、また厳しい修行にも必死の思いでついていった。

そんなある夜のこと、道信に呼び出された智行が聞いた話は思いもかけぬものだった。

「私はある女性のこと忘れられなくなってしまった。こうして勉強していることが、この女性と会っていると全て無意味なように思われるのだ。」

その女性とは都で評判の白拍子で、学問一辺倒の智行ですら、幾度かその名を聞いたことがあった。だが、共に厳しい修行に励ましあつてきた同志だと思つてきた智行にとつて、道信のこの言葉ははわか信じられるものではなかった。もともと道信は情熱的で一途だが少し突っ走るところがある。思いつめて周りが見えなくなっているのだろう。止めてやらなければならぬ。智行の言葉は厳しくなつた。

「それは一時の気の迷いだ。その白拍子だつて本気で相手にするものか。おまえは目の前の修行の辛さから逃げようとしているだけだ。目を覚ませ、道信。」

そのままうつむき、うなだれていた道信、肩を落として何かにじつと耐えているような道信の姿を智行は昨日のことに思い出すことができる。智行は道信がわかつてくれたものと思つていた。

二人で励ましあいながら続けてきた学問の道の大切さを道信もよくわかっているはずだった。

ところが数カ月後、道信は本山を出奔してしまつたのである。それ以来、道信の行方はまったくわからなかつた。智行は道信の行為が、二人で励まし合つた日々への裏切りのように思つたものだ。だが、いずれ道信には厳しい修行の道はあわなかつたのだ。それだけの男だつたのだと思ひ、自らの修行に熱中する中で、道信のことは記憶から薄れていった。こうして智行は都での修行を終え、知識を身につけ、立派な僧侶に成長して故郷の西山寺に帰つていった。

「あの白拍子にはすぐに捨てられてしまつたよ。」その言葉に、智行は古い思い出から呼び戻された。

「そんなことだろうと思つたよ。」

「その後はひどいもんだ。遊び暮らしが身についてしまつていたし、金はないし。ずいぶんひどいこともやつたよ。盗人みたいなことも……」

少しの間、道信は遠くをみるようにしていた。そしてゆっくり言葉をついだ。

「それでもなんとか生きられるものだな。人並みに女房をむかえて所帯ももつたんだ。」

だがその女も二年後に病で亡くなつてしまつたということだった。かわいそうなことをしてしまつた、と道信は、ぼつりとつぶやいた。

「いったいおまえ、ここへ何しに。いや、何だつて今頃、寺を訪ねる気になつたのだ。」

智行は自分の声为非難がましいものになつているのに気づき、言葉をあらためて聞いた。

道信は淡々と語つた。まともな暮らしをしようとした矢先に妻を亡くしたことは自分にとつて深い哀しみであつた。再び酒びたりになり、そして今度はもう生きる意欲すら無くしてしまい、すてばちな気持ちのまま、まだ雪残る北山へ向かつた。歩き疲れ、雪に足をとられた。そのまま眠るように死ねたらという思いが頭をかすめたという。

「でもその時みつけたんだよ。」
道信の声が急に華やいだ。

「雪の中に倒れてこのまま眠れると思った。ゆっくりと雪がとけていく頃にはもう冷たいとかいう感覚もなかった。その時き。雪がとけた地面の中に何か茶色い物が出ていたんだ。小指の先ぐらいいのがいくつも。妙に気になってまわりの土をどけてみたんだ。そうしたら、みつけたんだよ。」

「……」

「フキノトウさ。まだ雪がおおっているのに。掘ってみるともう鮮やかな薄緑色なんだよ。」

道信の顔はとても幸せそうに輝いている。智行は子供のように興奮して頬を紅潮させている道信の心をはかりかねていた。

「寺を出奔しても、盗みをやっても、女房につらくあたったりしても、悪いとは思わなかった。どうせ俺はこの程度の人間さ、つてね。後悔もしなかったよ。でもあのフキノトウをみたとき……」

道信はふいに言葉をつまらせた。そして智行の目をまっすぐに見つめて言った。

「智行、私はもう一度修行をやり直したいんだ。」

「お前、この寺にもどりたいと言うのか。」

「上人様のお許しがいただけるなら。いや、許していただけるまで何度でもお願いするつもりだ。」そんな勝手が許されるはずがない、と言おうとして智行は口をつぐんだ。自分がさしでがましく言うまでもあるまい。上人様は道信が期待を裏切つて出奔したことに深く心を痛めていらつしやつた。今更戻りたいなどと言つてもお許しになるはずがない。

道信には、上人様にお話ししてみ、とだけ言つて、智行は上人のもとに向かい、道信の帰郷を伝えた。意外にも上人は道信にすぐ会おうとおつしやつた。

「おまえは本当にたくさんのおまを学んできたのだな。もう一度この寺で修行したいというのなら、ここで暮らせばよい。おまえはいままでもこれからもずっと私の大切な弟子なのだから。」

上人は道信の手をとつた。その手は道信によつてしっかりと握り返されていた。

思わぬ展開に驚き、智行はそつとその場を離れた。仏の道をいったん捨て、罪を犯した男がいった何のために戻つてきたのか。上人様はなぜ、そんな男を再び弟子におとりになるといつのか。智行にはどうしてもわからなかつた。そのわからなさは、智行の中で次第に怒りに変わつていった。

智行はその夜、意を決して上人の部屋を訪ね、こらえかねた思いを吐き出した。

「上人様、道信は修行を途中でほうりだして逃げ出した人間です。そのような男をどうして再び弟子におとりになるのですか。あの男にはもう学問をする資格はありません。」

上人が何も答えないので、智行の声はさらに力が入りうわづつていく。

「他の弟子たちはみな厳しい教えを守り、修行に耐えて勉強しています。その辛さに耐えきれず逃げた道信を許してよいのですか。脱落した者には厳しい態度で臨むべきではないのですか。」

智行の厳しい言葉を七人は黙つて聞いていたが、やがて智行に優しいまなざしを向けてつぶやいた。「智行よ、人はみな自分自身と向き合つて生きていかねばならないのだ。」

それきり黙して語らぬ上人に、智行はいたたまれず一礼して部屋を退いた。

上人の言葉の意味をはかりかね、僧房に戻る気にもなれず、智行はふらふらと草のしげつた庭の小道へ歩きだした、

夜の月に照らされて、池の水がきらきらと光っている。月は暗い夜の闇の中から池のほとりに咲く一輪の白百合をくつきりと照らしていた。その純白の輝きに智行の心は圧倒された。知らずにあふれてくる涙を止めることができないうまま、智行は月の光の中にいつまでも立ちつくしていた。

